

私は子供の頃、厳冬の樺太で育ちました。戦争のさなかで日本中が貧困の厳しい時代でもあり、正月だけとは、両親の心尽くしで、晴れ着を着せてもらい、おうち料理や、工夫をこらしたお餅、人手困難な落花生等を家族そろって頂きました。この地方では、大晦日を年取りと言って、尾頭づきの豪華なお料理が食卓に並び、お正月よりもにぎやかに食事をしながら年越しをしました。早寝をすると早く年老いてしまうと言い、子供達もこの夜だけは、福笑いやいろはカルタ、トラップ、はさみ将棋等をして明け方まで遊びました。

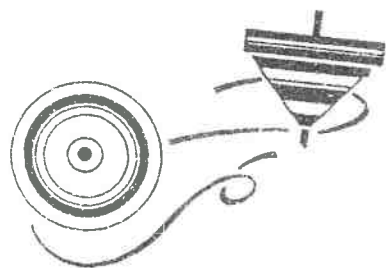
三が日は各町内で百人一首のかるた会があり、老若男女を問わず誰でも参加が出来、最後の夜は優勝決定戦があり、大変にぎやかでした。

◎終戦直後の雪谷

日常は代用食で貧しい食卓も、新年には、正月らしい御馳走が並び、母親手作りの晴れ着を着せられ、家族揃って新年の挨拶をして、お年玉を貰う。どんなにか子供達は楽しみにしていた事だろう。

元旦は晴れていれば、朝10時頃になると近所から羽根の音が聞こえてくる、みんな羽子板をもって飛び出していく。男の子は凧を上げるのに道路や畑の中までも走り廻る。昼頃になると墨を塗られたり顔を真っ赤にした子供達はお腹を空かせて家に戻る。余り甘くないお汁粉も特別美味しく感じた。夜は遅くまで家族と福笑い・双六・いろはカルタ等をした。百人一首の読みは歌の大好きだった母親の出番だった。

みんな懐かしい思い出となってしまった。



疎開していた両親の田舎は福井県の山の中、冬ともなれば雪が深く積もって二階が玄関になる程に町は一面雪の塊になる。

戦争が終わり、東京に家が建ち、周りの戦争の残骸が片付けられた頃は小学生。

暮は母と家の大掃除、窓ふき・障子張り・家の前の溝さらい・庭の落葉片付けと冬だと言うのに汗かく程良く手伝った。父と築地の河岸に正月用食料を買いに行き、やっと正月を迎える気分になる。母の作ってくれた晴着で友達と先生の家で御馳走になり、これ見よがしに着て歩いた着物も三日も着ると飽きて、普通の洋服がやっぱり良くなるのです。羽根つきの音はいかにも正月らしいのどかなで爽やかな響きでした。



昭和初期には1月12日に講内の家に集まり、新年の挨拶をして、講中の寄り合いをしたものです。

また、庚申塔・道祖神には必ずお参りをしていました。

どんど焼は、ニセ（若衆の前、12～14才の子供）が主体となって行われる行事で、勢の神（セイノカミ）にお祈りして、小正月（1月14日）に家いえから、門松・メ縄・書初などを小池の辺りに持ち寄って焼き、その火で飾り餅を焼いて食べました。この時、書初が空高く舞い上がれば、字が上手になると云われていました。

〔発行〕 わがまち大田雪谷地区委員会
〔編集〕 ふれあい雪谷編集委員会
（連絡先） 雪谷特別出張所内
（三三七二九）五一・一七
〔発行日〕 平成五年一月一日
（通巻第九号）

☆創刊して三回目の新年号を
発売するに当り、子供の頃
の正月風景や思い出を、大
正初期から昭和の戦後の頃
までを取材した。
☆貧困時代でもあり、お正月
だけはと言う肝入りが各地
に表われ、厳肅な心構えで
新年を迎えた様子が伺えた。
☆この雪谷地区でもさまたま
な、新年の行事があり、ま
さに遠い日の思い出しとして
ただただ懐かしく感じる。
☆身近な情報をお寄せ下さい。

編集後記

通卷第九

雪谷 小波

新年号

輝かしい新春を寿ぎ、皆々様のご健勝を御祈念申し上げます。
私は平成四年七月に、山上徳雄自治会連合会長の後任に推薦され、各自治会
長のご支援を頂きながら、種々の行事に携わって来ました。
雪谷地区の九自治会は、それぞれ独自の計画によつて、事業を行なっていま
すが、九自治会が合同で実施する事業が二つあります。
その一つは、雪谷地区ミニスポーツまつりで、昨年は九月二十七日に、小池
小学校で開かれ、快晴に恵まれて、一二〇〇名の参加を得て、盛況でした。二
つ目は大田区民スポーツまつりに参加することです。毎年十月十日の体育の
日に、大田区体育館で各地区対抗の綱引き大会があります。昨年は総勢八六〇
〇名が参加して、優勝を競いました。わが雪谷地区からは、日頃の練習成
果を発揮すべく、出場と応援に一〇〇名程が参加しましたが、惜しくも、一勝
一敗で敗れ二回戦に進めませんでした。
今年は、九自治会が融和団結して、是非捲土重来を期し
て頑張っていたきたいものです。
今後とも、皆様が、自治会行事に、積極的にご参加、ご
協力されますことを切望して、年頭のご挨拶と致します。



平成五年元日

雪谷地区自治会連合会長 直井 勇

遠き日のお正月



◎大正初期の四国地方

年の暮れが近づくとあちこちから“高い山から谷底見れば”と餅搗き唄と、威勢のよい三丁杵の音が聞えてくる。商店の店先にも春を迎える商品が並び、家いえの玄関先のメ飾りなどで子供心にもなんとなく落つかなくなる。いよいよ大晦日の夕暮れが近づくと、家いえから氏神様へ今年最後のお礼参りに出かける。皆家紋のはいった弓張提灯を手にし、新年を迎える一丁羅の着物を着た男達が続く。家では女子衆が正月三が日の料理準備に忙しい。年越しの夕餼の後は、台所で大きな天ぷら鍋で揚げ物が始まり、除夜近くまで続く。

さて一夜明けて元日、まず男達は暗い中に井戸からメ飾りのついた手桶に「若水」を汲み、これで雑煮をつくる。自家製の白味噌の味付けに丸餅を入れる。膳に正月料理が並び、神棚に灯明をあげ、お神酒と雑煮を供える。起きてきた女達と一同で、一年の平穏を祈り膳につく。家長の「おめでとうさん、今年もよろしゅう」の挨拶で、年長順にお屠蘇が廻される。これからの三が日の間朝の雑煮づくりと膳拵えは男の務めで女子衆は「上げ膳」でゆっくりとした朝を迎える訳である。

外は各戸に国旗が立ち、紋服を着た年始廻りの人が行き交い学校で元始節を終えた子供達がイカ揚げ（関東の凧）や羽根つきで、狭い通りも賑やかになる。夜は青年男女が集会所などに集まり、「百人一首カルタとり合戦」に熱中する。今ではこうしたなつかしい地方の正月風習も時代の移り変わりです。いつの間にかなくなり、すべてが都会化し遠い昔語りになってしまった。



◎大正末期の仙台

大正末期の仙台の正月は、門も玄関も開きっぱなし、門には門松、玄関には名刺受が袱紗の上に置かれ、家に上がる人も上がらない人も、名刺受に名刺をのせました。父や兄など男性は、紋付羽織袴で、三が日年始廻りをするのが習慣でした。

また当時は、若い男女が並んで歩いただけで、不良とされましたが、それがお正月だけは堂々と若い男女が、各家庭に代わる代わる集まり、カルタ会（百人一首）が出来ました。私の家でも従兄姉や近所の中高生を呼び、みかん・南京豆その他を数個のお盆に山と積み、大火鉢・小火鉢数個に炭火を真赤に、カルタ取りをしました。読み手は大概両親、上の句を読みはじめただけで、取り札がとび、意気込みの強かったこと。姉三人も競争で練習してました。従兄など取り札が破れるので木の札にした程です。何回かが終われば、母手製のちらしずし・汁粉・うどんなどが出、その後はトランプをして、怪談話へと12時過ぎまで、楽しかった思い出です。

◎初夢の思い出

お正月の二日は、初荷・書初め・初夢と云われます。二日の夜、女学生の私は妹達と宝舟を折りました。それに母から習った「なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな」（回文）と上から読んでも下から読んでも同じ文の歌を書いて、枕の下に入れて寝ました。

昔から、初夢のベストスリーは、1富士・2鷹・3茄子と云われ、夢の中に、これが出てくればその年はラッキーとされました。

翌朝、目が覚めた時、妹や弟の宝舟は、枕の下をとび出して、畳の上を漂っていました。

戦後の物の乏しい時、お医者様の薬の紙で作ったこともある宝舟。今は色も、質も豊富な紙で作る宝舟でどんな初夢をみるのでしょうか。

◎大正時代の石川台

大正初期の石川台の商店は、現在の中原街道沿いに（大和銀行の辺りに火の見櫓が在った）疎らにあった程度ですが、年末になると年の市が立って縁日屋さんも店を出し、メ飾りや食料品など、正月用品が売られて賑わいました。

また、正月になるとお日祭「おひまち」と云う、地域の親睦のための行事がありました。この催しは毎年、各戸持ち回りになっており、当番で宿になった家へ地域の婦人たちが集まって料理を作り準備します。会費は白米で五合、お金のときは20銭でした。会食は夕食と翌朝の2回集まって行われ、お酒も入っての和やかな新年の集いでした。

その他、1月6日には地域の消防団による、町内を回っての出初めがあり、半天を着た若い衆が梯子に乗ってみかんをまき、それを奪い合った思い出もあり、今では考えられない正月の行事でした。

◎東京芝のお正月

平成5年のお正月を、テレビを見ながら祝っているご家庭も多いと思います。昭和31年の頃は、テレビもなく、子供から大人まで一緒になって、羽根つき・凧あげ・カルタをして遊んだのを覚えています。芝の増上寺の除夜の鐘を聞き、元旦に母と春日神社に初詣でに行きました。

この頃まで、しし舞いが家いえをまわり、三日には、父が浅草に連れて行ってくれるのが決まりで、都電に乗り、お年玉で好きな物を買うのが楽しみでした。

羽根つきをした道も今ではコンクリートのビルに囲まれ、柔らかい日差しをうけた町がなつかしく思われます。昔から変わらないのは、私も、大根・小松菜・油あげ入りのお雑煮を作っていることぐらいでしょうか。



（昭和30年頃
の子供達）